

ません。さあ、行きなさい！」と小声で言った。それでぼくは出かけていき、エーミールは、と尋ねた。彼は出てきて、すぐに、誰かがヤママユガをだいなしにしてしまった。悪いやつがやったのか、あるいはネコがやったのかわからない、と語った。ぼくはそのチョウを見せてくれと頼んだ。二人は上に上がっていった。彼はろうそくをつけた。ぼくはだいなしになったチョウが展翅板の上に載っているのを見た。エーミールがそれを（イ）繻うために努力した跡が認められた。壊れた羽は丹念に広げられ、ぬれた吸い取り紙の上に置かれてあった。しかしそれは直すよもなかった。触角もやはりなくなっていた。そこで、それはぼくがやったのだと言い、詳しく話し、説明しようとした。すると、エーミールは激したり、ぼくをどなりつけたりなどはしないで、低く、ちえつと舌を鳴らし、しばらくじっとぼくを見つめていたが、それから「⑤そうか、そうか、つまりきみはそんなやつなんだな。」と言った。

ぼくは彼に、ぼくのおもちゃをみんなやると言った。それでも彼は冷淡にかまえ、依然ぼくをただ軽蔑的に見つめていたので、ぼくは自分のチョウの収集を全部やると言った。しかし彼は、「けっこうだよ。ぼくはきみの集めたやつはもう知っている。そのうえ、今日また、きみがチョウをどんなに取り扱っているか、ということを見ることができたさ。」と言った。

⑥その瞬間、ぼくはすんでのところであいつの喉笛に飛びかかるところだった。もうどうにもしようがなかった。ぼくは悪漢だということに決まってしまう、エーミールはまるで世界のおきてを代表でもするかのように、冷然と、正義をたてに、（ウ）侮るように、ぼくの前に立っていた。彼は罵りさえしなかった。ただぼくを眺めて、軽蔑していた。

その時初めてぼくは、一度起きたことは、もう償いのできないものだということを悟った。ぼくは立ち去った。母が根ほり葉ほりきこうとしないで、ぼくにキスだけして、かまわずにおいてくれたことをうれしく思った。ぼくは、床にお入り、と言われた。ぼくにとってはもう遅い時刻だった。だが、その前にぼくは、そつと食堂に行つて、大きなとび色の厚紙の箱を取つてき、それを寝台の上に載せ、闇の中で開いた。⑦そしてチョウチョを一つ一つ取り出し、指でこなこなに押し潰してしまった。

問一 傍線部（ア）（ウ）のカタカナは漢字に、漢字は読みをひらがなで答えよ。

問二 次の一文はどこに入るか。入る直後の五字を抜き出せ。

●その瞬間にぼくの良心は目覚めた。

問三 傍線部①とあるが、具体的にどのような思いによって「誘惑に負け」たのか。それを説明した次の文の空欄に入る言葉を指定に従つて入れよ。

●ヤママユガの（本文から二字）を見たいという思い。

問四 傍線部②とあるが、具体的にどのようなことが「不幸」だというのか。最も適切なものを選び、記号で答えよ。

ア エーミールに迷惑をかけてしまったこと。

イ エーミールの部屋に入ってしまったこと。

ウ ヤママユガを盗んでしまったこと。

エ ヤママユガが潰れてしまったこと。

問五 傍線部③が指しているものを、本文から九字で抜き出せ。

問六 【 に入るべき言葉として、最も適切なものは次のうちどれか。

ア 大の大人

イ 道徳心のない人間

ウ 模範少年

エ こっぴどい評論家